

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『ゲーム理論はアート 社会のしくみを
思いつくための繊細な哲学』

松島 齊 著 | 日本評論社、2018、280pp.

本書は、ゲーム理論の高名な研究者である著者が、貧困の救済、全体主義、腎交換などのタブー、証券取引などの様々な「社会のしくみ」を考えるに際してゲーム理論をどのように使うことができるかという点を、入門者向けに解説したものである。

入門者向けといっても、ゲーム理論の入門書にありがちなゲーム理論そのものあるいはその理解のために必要な数学を解説するのではない。先述した具体的な「社会のしくみ」を説明する簡単な仮設的モデルを提示しながら、ゲーム理論が特に経済学においてこれまで如何に大きな貢献をしてきたか、また今後も有益であるために何が重要かという点が説明されると共に、経済学を離れた社会理論としてのゲーム理論の可能性を説く。この過程において、仮設モデルを思いつく創造性、芸術性が強調される。その一方で、ゲーム理論は具体的な問題解決の手助けにはなるがそれだけでは最終的な解決には至らないという点についても正直に認めている。

本書はこれらについて個人的体験を含めつつ著者独特の筆致で描いており、この点において読者を選ぶ面があるのかもしれない。仮にそうであったとしても、芸術性、創造性というこれまで必ずしも重視されていなかった観点からゲーム理論を眺めるという着想は既存の類書からは得がたいものである。他とは一線を画す新たな切り口による入門書の登場である。

評／『彦根論叢』編集委員／片山雅志

『政府の銀行貸出への関与は日本の中小企業を強くしたか 円滑化法、信用保証制度、資本注入政策の効果についての実証研究』

近藤隆則 著 | 晃洋書房、2018、182pp.

本書は、政府の銀行貸出に対する関与のうち、中小企業金融円滑化法、公的信用保証制度、銀行への資本注入政策という3つの政策・制度について、政府関与による効果の実証分析を試みたものである。

その一例として、円滑化法施行から失効1年前までの3カ年分のデータを用いて、同法に基づく貸出条件変更の増加は当期の倒産件数を有意に減少させるが、1期先には係数の有意性はなくなり、2期先には逆に有意に倒産件数を増加させているとの結論を得、そのような分析結果などを根拠として、円滑化法は政府の失敗であるとの評価を行っている。

しかし円滑化法は、本書にもある通りあくまで中小企業再生のための「時間稼ぎ」でしかなく、再生支援協議会や銀行等金融機関を中心とした再生支援の取組とセットになって中小企業の倒産を防止するという政策目的を達成しようとしたその一部分であって、仮に円滑化法による条件変更自体は機能したとしても再生支援がきちんと作動しなければ倒産は増加する。この点を踏まえれば、円滑化法による条件変更だけではなく再生支援策についても踏み込み、両者合わせて検証を行わなければ、円滑化法に関する正確な検証を行うことができないであろう。

このように気になる点はいくつか存在するものの、本書のような円滑化法等の政策効果に関する直接の実証研究はこれまではなく、今後の政府による貸付市場への介入政策を検討する上で多大な意義を有するものと考えられる。

評／『彦根論叢』編集委員／片山雅志

